平安時代の女性たちの自己主張*

―『源氏物語』の「女」という語を中心に―

金　玉　京**
(e-mail : itsoon@hanmail.net)

目　次

一　はじめに
二　結婚相手としての理想的な女性
　―「雨夜の品定め」を中心に―
三　男性の立場で見る「女」
四　母親の立場で見る「女」
五　紫上の自己主張としての「女」
六　おわりに

一　はじめに

『源氏物語』は、光源氏や薫などをめぐる数多くの女性たちが登場し、その女性たちの生き方を描き出しているところに、この物語の主な意味があることは、すでに言われている。そもそも成人した光源氏が物語の主人公として本格的に活躍する帚木巻1)は、「雨夜の品定め」による女性談義が話の中心になっていて、物語は初めから女性のあり方に関心を寄せ、それを表面に打ち出して問題にしている。当時の文芸作品において『源氏物語』ほ

＊本論文は住友財団の2007年度「アジア諸国における日本関連研究助成」事業の助成金によるものである。

＊＊韓南大学校 講師 平安文学専攻

1)『細流抄』では、「帚木と云名は惣ては源氏一部の名にかけて見るべきなり、一切衆生のあるかとすればなき有さまに能叶へり、桐壷巻は序文までも入たたず、此帚木巻物語の序分也と見へたり。(源氏物語古注集成７『細流抄』おうふう)」とある。また、和辻哲郎は帚木巻を「一つの物語の発端としての書き方」になっているとし、「帚木の発端は、後に来る物語を呼び起こすべき強い力を持ってゐるが、それに先行する何の描写をも必要とするものでない。」と桐壷巻をうけていないとしている。(和辻哲郎『日本精神史研究』岩波書店・大正15年 p.133)

www.kci.go.kr

ど女性について多くのことを記述したものはなく、とりわけこの帚木巻は女性論・婦人論の総論と言われるほど様々な女性のあり方を取り上げている2)。ところが、この物語では女性に関するもののほとんどが男性の立場で語られ、帚木巻の女性談義は、それをよく示している。

今一つ、「女」という語を見出しにしてみても、その傾向は明らかである。この「女」という語は、女性への見解を述べるときによく用いられる表現で、物語の語り手や作中人物の口から語らせ、身分の高低に関係なく広く使われている。しかし、作中女性の口を通されて使われている用例は、わずか4例にすぎない3)。勿論、ここでいう「女」は、男性とは異なる女性の特色などを示す一般化された「女」に限定した場合のことである4)。物語では女性たちのあり方を多く描いているにもかかわらず、作中女姓による「女」についての考えはあまりふれられていないのである。

本稿は、源氏物語に用いられている「女」という語をキーワードにして、物語における女性への考え方を考察する。ただ、物語の女性への見解は、結婚問題を契機としてなされる場合が多いので、問題にする「女」という語も、結婚に関わるものを中心に考えたい。それを考える前に、まず、この物語の女性論を総括したというべき「雨夜の品定め」では、女性をどのように見ていたのかを見ておきたい。

二　結婚相手としての理想的な女性

―「雨夜の品定め」を中心に―

五月雨の降りつづくある夏の夜、頭中将は物忌みゆえに宮中に留まって何もできないでいる光源氏の宿直所を訪れ、女性を話題にして話す。そこに左馬頭と藤式部が加わって、四人の男による「雨夜の品定め」は始まる。周知のごとく、この貴公子たちによる女性談義は、女性の品を三つに分けて、女性としてしかるべきあり方や理想的な結婚相手について語るもので、その焦点は主に中の品の女性に当てられている。

この男性四人の内、左馬頭は女性の良し悪しを判断したり評価したりしてまとめていく中心

2) 竹村義一「源氏物語にあらわれた女性観」（『源氏物語の女性像』有精堂・1970　p.164）

3)「おんな」は、総244例の内、特定の女性を指す97例と一般論としての女性を指す80例、特殊な用法としての女性が67例（この中には、「女にて見奉つらまほし」や「かしこき女のためし」といった用例など）ある。

4) 清水好子は、特定の女性を指す「女」について、作中人物が「おんな」や「おんなぎみ」と呼ばれるときは、ただ男に対する女として見られているときであり、それらはいずれも恋の場面に限られているといっておられた（増補板『源氏の女君』塙新書・1967　p.13）。これについては、森本元子も「源氏物語の「女」考」で類似なことを論じている（『源氏物語の探求』第八輯・源氏物語探求会・風間書房・1983）。本稿は、一般論としての女性を指す例だけに限定して考えているので、これらの論と方向性がやや違う。

www.kci.go.kr

的な役割を担っている人物である。特に彼が力を入れて語りつづけているのは、思いに叶う女性を妻とすることの難しさについてである。実際に相手の女性に会ってみると、期待とは異なって、表向きの情けばかりに身を入れていたり、家事という実生活だけを励んでいたりして、どちらの女性にも満足できない。どうせ男性には自分たちの求める女性は見つからないのである。それなら、「ただひたぶるに児めきて柔かならむ人（帚木・64）[5]」を妻とすべきだ、と左馬頭は言っている。なぜなら、素直で従順な女性の場合は、あまり自己を主張しない傾向があり、そのほうが男性にとっては理想にかなった妻にできるという期待が持たれるからである[6]。しかし、夫の留守中には、一人で何も判断できず頼りない欠点が表立つ場合もあるので不安が残る。よく考えてみると、やはり普段は愛想がなく、親しみにくい女性であっても、何かの折に活躍してくれる女性の方が妻としてはいいかもしれない、と左馬頭はあれこれ妻とすべき女性のあり方を考える。そして結論的に左馬頭が導き出した妻の条件とは、次のようなものであった。

> 今はただ品にもよらじ、かたちをばさらにも言はじ、いとくちをしく、ねぢけがましきおぼえだになくは、ただひとへにものまめやかに、静かなる心のおもむきならむよるべをぞ、つひの頼み所には思ひおくべかりける、あまりのゆゑよし心ばせ、うち添へたらむをば、よろこびに思ひ、すこし後れたる方あらむをも、あながちに求め加へじ。うしろやすくのどけき所だに強くは、うはべの情けは、おのづからもてつけつべきわざをや。（帚木・65）

要するに、左馬頭はここで生涯の妻とすべき女性を選ぶ基準は、相手の女性の身分や地位などの社会的な背景にも外形的な美しさにでもなく、頼もしく落ち着いた心持ちにある、といっている。竹村氏は、この左馬頭の意見に対して、「作者の謙虚と深い愛情からくる人間への肯定的態度、人間性尊重、現実主義のひらめき[7]」を見い出している。

しかし、当時は男女が直接会うまでに、相手に関する情報、たとえば家柄や世評、あるいは歌のやり取りによる趣味教養などが、相手を判断する材料となっていた。従って、相手の女性の心持を判断して結婚相手にすることは、ほとんど不可能に近い。むしろ、妻を選ぶに当たって、相手の女性を支えている外的条件に頼るのが普通のあり方であった。この物語の中でも、例えば、浮舟の母が娘の結婚相手にと考えていた左近少将は、浮舟が常陸介の実子でないことを知って縁談を破談にする。少将はその代わりに介の実娘と結婚するが、仲人がこの縁談を持ちかけてきたとき、少将は「もはら顔容貌のすぐれたらん女の

5) 本文引用は、新編古典文学全集『源氏物語』による。以下、同様。

6) 主人公の源氏が若紫を引き取って、理想的な女性に育て上げるために早くから教えたのも、「女は、心やはらかなるなむよき（若紫・257）」ということであった。源氏のこうした考え方は、「雨夜の品定め」の女性談義に影響されていることは明らかである。さらに、匂宮も妻の中君に向かって、「すべて、女は、やはらかに心うつくしきなんよきこと（宿木・467）」と、穏やかで心が素直であるのをよいとしている。

7) 前掲書 注2）と同じ。（『源氏物語の女性像』有精堂・1970　p.170）

www.kci.go.kr

願ひもなし。品あてに艶ならん女を願はば、やすく得つべし。（東屋・25）」といって、結婚相手の容貌の美しさや品格の良さなどは問題にしていない。少将は「人にすこし謗らるとも、ながらへて頼もしきこと（東屋・32）」が可能だと判断したから、常陸介に近づいたのである。少将がなによりも重視したのは、相手の女性の経済的な条件であった。

つまりここで左馬頭が、結婚相手の外的条件よりも心持の有り様を重視すべきだとする意見は、実際物語で叙述している状況とも大きく違っている。いわば、左馬頭の言っている内面の充実な女性を生涯の伴侶とすることは、作者の人間性尊重や現実主義のひらめきというよりも、当時の実情とは掛け離れたあくまでも実現しにくい観念的な理想に近いものであったに違いない。

このように相手の女性の性質を重視していた左馬頭は、その具体的なあり方として次のような点をあげている。

> すべて、よろづのことなだらかに、怨ずべきことをば見知れるさまにほのめかし、恨むべからむふしをも憎からずかすめなさば、それにつけて、あはれもまさりぬべし。（中略）「さしあたりて、をかしともあはれとも心に入らむ人の、頼もしげなき疑ひあらむこそ大事なるべけれ、わが心あやまちなくて見過ぐさば、さし直してもなどか見ざらむとおぼえたれど、それさしもあらじ。ともかくも、違ふべきふしあらむを、のどやかに見しのばむよりほかに、ますことあるまじかりけり。（帚木・68）

ここでは、女性の心持を判断する一つとして、男の浮気に対処する女性の態度に焦点をあて、男の浮気などにも直接的な嫉妬を避けて、「かすめる」「ほのめかす」「見しのぶ」態度をとる女性を好ましいといっている。

周知のとおり、当時は結婚形態として一夫多妻制が認められ、貴族男性は何人かの妻を持っていた[8]。それゆえに、男性にとって女性の嫉妬は避けられない問題であったに違いない。物語では理想的な女性として描かれる紫上も、ただ唯一の欠点として嫉妬があげられ、源氏の女性関係における紫上の嫉妬は絶えず問題にされていた。どんなに優れた女性であっても、夫の浮気に動揺せずに平然といられるはずがない。勿論、嫉妬は相手への愛情と関心の深さを表す一つの表現でもある。それを十分に承知しているからこそ、男性たちも女性の嫉妬をあってはならないものとしていながらも、一方ではやむをえないものとして

8) たとえば、栄華物語では道長が息子の頼通に向かって、「男は妻を一人のみやは持たる、痴のさまや。いままで子もなかめれば、とてもかうてもただ子をまうけんとこそ思はめ。このわたりはさやうにはおはしましなん。（栄華物語十二・56）―本文引用は、新編古典文学全集『栄華物語』による。」と言っている。頼通に子供がめぐまれないので、新しく妻を娶って跡を継がせるという意味でも、もう一人の妻が必要であるという。この道長の語り口からも明らかなように、当時の貴族男性には、一人の妻を固執するほうが、むしろ普通のあり方ではなかったようである。ただし、増田氏によると、当時男性にとって妻と呼べる相手はせいぜい二人三人くらいだったらしい。（増田繁夫「十世紀後半の貴族社会の婚姻制度」（『源氏物語と貴族社会』吉川弘文館・2002・p66～108）

www.kci.go.kr

容認せざるをえない。ただ、嫉妬の仕方が問題なのである。

例えば、髭黒の北の方の場合のように、夫が玉鬘に熱中していることに怒り狂って、灰をかぶらせたりするなどして、夫の女性関係に対する激しい嫉妬心を剥き出しにしてはならないのである。もちろん、北の方のこうした行動は、「例の御物の怪の、人に疎ませむとする事（真木柱・366）」とされ、物語では貴族女性の激しい感情表出を、「もののけ」に取り付かれたことによるものとして説明している。当時は女性における感情表現さえ自由にできない制約の多い社会であったことが知られる。

つまり、女性は嫉妬をするにしても、面と向かって自分の感情を露骨に表すというより、そっとそれとなく仄めかすという、ほどのよさが望まれる。これはたとえ男の浮気に関するときだけに限られるものではなく、女性の感情の表し方や身の振る舞いなどにもこうした程度のよさが求められたのである。

以上、「雨夜の品定め」における女性への考えを見てきたが、それを整理してみると、女性は自己を強く主張せずに誠実で穏やかな性質を持ち、何でも寛容な態度で忍耐すべきである。そうすることで生涯の伴侶として長く平穏な夫婦関係も維持されるのである。要するに帚木巻の女性談義における女性への見解は、男の男による男のための理想的な結婚相手への希求としての妻の条件や態度に重点が置かれていたことがわかる。

それでは、こうした「雨夜の品定め」に描かれた男性の女性への見解に対して、女性は「女」としての自身をどのように見ていたのか。以下、「女」という語を中心にして検討していきたい。

三　男性の立場で見る「女」

「女」という語は、女性の特色を一般化して示すときに用いられる表現で、話しの主体が作中人物の男性なのか女性なのかに分けて考えることができる。本節ではまず男性の立場で語られたものについて考えたい。

当時の女性は男性に比べて社会的経済的活動が容易でなかったために、一人の力では世の中を生きることが難しく、一層のこと保護者の援助を必要とする存在であった。それは、北山の僧都が若紫を願う源氏に向かっていう次の言葉によく示されている。

> 「あやしきことなれど、幼き御後見に思すべく聞こえたまひてんや。思ふ心ありて、行きかかづらふ方もはべりながら、世に心のしまぬにやあらん、独り住みにてのみなむ。まだ似げなきほどと、常の人に思しなずらへて、はしたなくや」などのたまへば、「いとうれしかるべき仰せ言なるを、まだむげにいはけなきほどにはべるめれば、戯れにても御覧じがたくや。そもそも女は、人にもてなされて大人にもなりたまふものなれば、くはしくはえとり申さず、かの祖母に

www.kci.go.kr

語らひはべりて聞こえさせむ」とすくよかに言ひて、ものごはきさましたまへれば、若き御心に恥づかしくて、えよくも聞こえたまはず。 (若紫 · 214)

北山へ療養に訪れた源氏は、かねてから恋慕していた藤壺に似通った若紫を見つける。若紫は有力な後見者を持っていず、唯一の保護者である祖母も病気の身の上で、いつ亡くなるかわからない状態である。源氏はこうして若紫が藤壺ゆかりである点やかつての自分と同じく危うい状況に置かれていたことへの同情心から世話役に申し出る9)。それに対して僧都は、若紫はまだ幼い子どもなので源氏の相手としては似つかわしくないとしながら、女性は本来自分一人の力では成人になれるものでないことを言って、その決定を若紫の祖母に委ねている。僧都は源氏のいう世話役の内容を結婚相手として受け取ったので、若紫を「むげにいはけなきほど」と、源氏に相応しくないことを言っていた。勿論いつかは若紫にも源氏の言っている「御後見に思すべく」存在が必要であることを念頭に置いた発言である。

このように僧都は「女」という語を用いて、若紫にとっての世話役の必要性を言及しているが、若紫は親王の娘という高い身分を持つ女性であり、物語ではこうして皇族出身の女性にとっての後見者の必要性を説く場合に、よく「女」という語を使っている。女三宮の場合もそれに当てはまる。

女三宮は、朱雀院と藤壺女御の間で生まれた内親王である。父の院は、母女御に先立たれた娘を、多くの子女の中でもっともいつくしみ愛していた。ところが病がちな朱雀院は、この世に残された時間が少ないことを心細く思い、かねてから志していた出家を決心する。そして、自分以外には有力な後見者を持たない最愛の娘女三宮の不安な将来を心配して、腹違いの弟源氏を宮の結婚相手と選び、源氏本人にその心中をほのめかす。源氏はそうした朱雀院に向かって、次のようにいっている。

「げにただ人よりも、かかる筋は、私ざまの御後見なきは、口惜しげなるわざになむはべりける。春宮かくておはしませば、いとかしこき末の世のまうけの君と、天の下の頼みどころに仰ぎきこえさするを、ましてこのことと聞こえおかせたまはんことは、一事としておろそかに軽め申したまふべきにはべらねば、さらに行く先のこと思し悩むべきにもはべらねど、げに事限りあれば、おほやけとなりたまひ、世の政御心にかなふべしとはいいながら、女の御ために、何ばかりのけざやかなる御心寄せあるべきにもはべらざりけり。すべて女の御ためには、さまざまことの御後見とすべきものは、なほさるべき筋に契りをかはし、え避らぬことにはぐくみきこゆる御まもりめはべるなむ、うしろやすかるべきことにはべるを、なほ、強ひて後の世の御疑ひ残るべくは、よろしきに思し選びて、忍びてさるべき御あづかりを定めおかせたまふべきになむはべなる」と奏したまふ。 (若菜上 · 47～48)

ここで源氏は、女三宮は皇女という高貴な素姓を持っているからこそ、私的な後見者が

9) 増田繁夫「源氏物語作中人物論の視角」 (『国文学』1991 · p.15)

www.kci.go.kr

なくてはならないとしている。女三宮の場合、東宮という強力な後ろ楯がいて、院の死後でも将来は何も心配することはない。勿論、東宮は公的な立場にいる存在なので、些細なことまでを気づかうことはできまい。要するに、女三宮は一生を独身で貫き通されても、東宮や源氏自身などが背後にいるから、生活の面においては、それほど心配は要らない。ただ、東宮は公的な立場にいるから、世話して上げるにも限界がある。従ってどうしてもその将来が不安ならば、結婚させて夫の保護下に置くのが一番安心できる方法である、と源氏は女三宮にとっての結婚の必要性をあつく語っている。

女性は親兄弟であれ夫であれ、自分以外の人の援助に支えられて生活していくしかない依存的な存在である。殊に高い素姓を持つ女性の場合は、有力な後見人のいない状況で、独身のまま生活を営んでいくことは、大変困難である。その一つの原因には、他の身分の女性に比べて、自分の意思や判断を必要としない環境で育てられた点があげられる。

この物語では、すでに末摘花という女性を通して、後見者のいない独身女性の生活像を垣間見ることができた。末摘花は常陸宮の「末にまうけていみじうかなしうかしづきたまひし（末摘花・266）」娘で、親王の娘という高い身分に生まれながらも、早く親に死なれて一人常陸宮を守って困窮な生活を余儀なくされた。屋敷はだんだん荒れていき、周りの女房は一人二人そばを離れていった。しまいには受領に身を落とした叔母の娘たちの女房に身を落としかねない状況にまで追い込まれる。末摘花の場合は、女三宮のように世評が高いわけではなく、その醜い姿や古めかしい生活態度が極度に誇張して描かれているため、一見すると女三宮の境遇とは違うように見える。しかしながら、少なくとも末摘花の高い身分にふさわしくない内実や育てられた環境のために、一人で世を生きてゆくすべが分からず、それを十分に自覚できずに生きてきた受動的なあり方は、女三宮によく似ている10)。実は女三宮の幼く頼りない性格やその育ってきた環境から、女三宮は末摘花以上に保護者を必要とされる存在なのである。つまり、後見のいない皇族女性にとって結婚は安定した生活のためには不可欠のものであった。

この高貴な女性にとっての夫という庇護者の重要性は、落葉宮の女房たちに宮の再婚の必要性を強く語っている大和守の言葉にも表れている。

> その日、我おはしゐて、御車、御前など奉れたまふ。宮は、さらに渡らじと思しのたまふを、人々いみじう聞こえ、大和守も、「さらにうけたまはらじ。心細く悲しき御ありさまを見たてまつり嘆き、このほどの宮仕は堪ふるに従ひて仕うまつりぬ。今は、国のこともはべり、まかり下りぬべし。宮の内のことも見たまへ譲るべき人もはべらず、いとたいだいしう、いかにと見たまふるを、かくよろづに思し営むを、げに、この方にとりて思たまふるには、かならずしもおはしますまじき御ありさまなれど、さこそはいにしへも御心にかなはぬ例多くはべれ、一ところや

10) 拙稿『源氏物語の女三宮における一試論』（武庫川国文・2005　p.40）

www.kci.go.kr

は世のもどきをも負はせたまふべき。いと幼くおはしますことなり。たけう思すとも、女の御心ひとつにわが御身をとりしたためかへりみたまふべきやうかあらむ。なほ人のあがめかしづきたまへらんに助けられてこそ。深き御心のかしこき御おきても、それにかかるべきものなり。君たちの聞こえ知らせたてまつりたまはぬなり。かつは、さるまじきことをも、御心どもに仕うまつりそめたまうて」と言ひつづけて、左近、少将を責む。 (夕霧 · 462～463)

これは、夕霧の求婚を避けて小野に籠もり、京へは帰るまいとする落葉宮の意中を察した大和守が、落葉宮付きの女房を叱責する場面である。落葉宮を向かえるために小野を訪れた大和守は、左近と少将に向かって宮が夕霧の求婚を受け入れるべき理由を長々といっているが、その言葉の中には女性にとっての結婚の意味を考えさせるものがある。

ここで大和守は、宮の京へは「さらに渡らじ」という言葉には従えないとしている。宮の置かれた状況に心を痛め、母御息所の死後より今まで宮のために自分のできる限りのことはした。が、今は任国での用務もあって下向しなければならず、宮に勤めることができなくなった。そうして後の世話を任せる人もいない宮の今後が心配な折に、夕霧のような権勢家が心を寄せて世話してくれるので安心である。いくら夕霧の心遣いや援助が懸想からなるものであっても、そのために宮本人が世間の非難を受けることはない。というのは、皇女が夫と死別して再婚した例は他にも多いからである11)。それを宮本人もよくわかっているはずなのに、京へは帰るまいと意地を張っているのは、幼い子どものような分別のない発想としか受け取れない。女の身の上の始末や、思慮深い考えに基づく立派な方針、例えば出家生活なども、だれかの保護下にあってはじめて可能である。

要するに、自らの力ではこの世をうまく生きることが困難である女性にとっては、自分以外の人による「後見」「まもりめ」「もてなす」「はぐくむ」「あがめかしづく」という行為が伴わなければ、自らの意志や分別ある判断も、ほとんど意味がないのである。

以上の用例は、有力な後見者を持たない皇族女性の世話役による安定した生活が男性の口を通じて強調されている共通点を持っている。しかし、皇族女性といっても置かれた環境が違い、「女」という語を用いる男性の立場もそれぞれ異なっている。若紫の場合は、まだ十歳ばかりの子どもであり、孤児同然の身の上となることが予想されるほど危うい状況に置かれていた。「女」はそうした若紫の境遇を念頭に置いて、祖母の兄である僧都によって発せられたものである。また、女三宮は皇女という最高の身の上でありながら、その身分地位に相応しくない幼さのために、より庇護者の存在が必要とされている。しかも結婚相手と内定されていた源氏自身が、「女」という語を用いて宮にとっての世話役の必要性を強調している。一方、落葉宮は、若紫や女三宮と違って皇女の再婚という宮本人として

11) この点について全集は「『皇胤紹運録』その他の公的記録によれば、当時の皇女が夫と死別後に再婚した例は見られない（新編『源氏物語④』小学館 · p.581）」とあり、この大和守の言葉は、逆に記録類とは異なる当時の実態を想像させられるものとしている。

www.kci.go.kr

は不本意と思われる結婚問題を抱えている。それぞれ女性にとって異なる事情や状況があることはいうまでもないが、落葉宮の場合は、夕霧の家来の大和守が宮付きの女房を責める言葉に「女」という語を用いて、夫の柏木や母の一条御息所を亡くした今の落葉宮の境遇の厳しさを認知させ、宮にとって夕霧という存在の重要性を強調している。勿論、これらの例には女性当の本人の結婚に対する立場や悩みなどは見られない。というよりも、いまだ物語の叙述が男性中心に展開されているために、女性自身の結婚に関する考え方はあまり表出されていない。が、第三部の宇治十帖へ進んでいくと、物語では作中女性の結婚に対する本人の立場や悩みを本格的に取り上げて問題にする。

それでは、「女」という語が作中女性の口を通されたとき、「女」はどのようなものとして捉えられているのか。

四　母親の立場で見る「女」

作中女性による「女」という語は、物語の第一部では六条御息所、第二部では女三宮の乳母と紫上、第三部では浮舟の母中将の君に用いられている。これらの用例は、すべて母親の立場で娘の結婚問題に関わって発せられたという共通性を持っている。まず、六条御息所の場合から、その内容を具体的に探ってみたい。

御息所は、伊勢から帰京してしばらくは昔とかわりのない優雅な生活をして暮していたが、にわかに重い病気を患って出家してしまう。それを知った源氏は御息所を訪れて思いを込めて見舞う。御息所はそうした源氏の深い思いに感心しながら、自分の死後孤児同然となる娘斎宮のことを託す。その頼みの言葉の中には「女」についての御息所の考えが、下記のように記るされている。

> 「心細くてとまりたまはむを、かならず事にふれて数まへきこえたまへ。また見ゆづる人もなく、たぐひなき御ありさまになむ。かひなき身ながらも、いましばし世の中を思ひのどむるほどは、とざまかうざまにものを思し知るまで見たてまつらむとこそ思ひたまへつれ」とても、消え入りつつ泣いたまふ。「かかる御事なくてだに、思ひ放ちきこえさすべきにもあらぬを、まして心の及ばむに従ひては、何ごとも後見きこえむとなん思うたまふる。さらにうしろめたくな思ひきこえたまひそ」など聞こえたまへば、「いと難きこと。まことにうち頼むべき親などにて見ゆづる人だに、女親に離れぬるは、いとあはれなることにこそはべるめれ。まして、思ほし人めかさむにつけても、あぢきなき方やうちまじり、人に心もおかれたまはむ。うたてある思ひやりごとなれど、かけてさやうの世づいたる筋に思しよるな。うき身をつみはべるにも、女は思ひの外にてもの思ひを添ふるものになむはべりければ、いかでさる方をもて離れて見たてまつらむと思うたまふる」など聞こえたまへば、　（澪標・310～311）

www.kci.go.kr

ここの御息所は、自分亡き後の娘の後見役を引き受けた源氏がそれを言い訳にして娘に心を寄せるのではないかと心配している。そのことは御息所本人の過去を振り返ってみても予想するに難くない。それで御息所は、源氏にむかって娘を好色がましい筋には思うな、娘には男女の愛情問題でつらい目に合わせたくない、とくれぐれも頼んでいる。ここで御息所は、不幸なわが身に寄せて人の心を知るにも、女は思いもよらないことで悩みを重ねるものである、とわが身をもって娘の将来への不安感を表している。

周知のごとく、御息所は斎院の禊の見物の折に、葵上側との車の所争いに巻き込まれて深く傷つき、それをきっかけにして生霊となって葵上を取り殺す。しかも、そのことを源氏に知られてしまい、身のやり場に悩み苦しんだ御息所は、娘の斎宮について伊勢へ下ることを決心する。御息所は、思いがけない源氏との関係によって、物思いにふける生活をし、生霊というおぞましい現象にあわれ、身を削る苦しみをも味わった。そうした痛切な経験によって導かれたものが「女は思ひの外にてもの思ひを添ふるものになむ」という言葉である。

御息所は、つらいわが身を噛み締めることで、男女関係による女の不幸に自覚し、娘には自分のように薄幸な道を歩ませたくないと思っている。そしてそれが「いかでさる方をもて離れて見たてまつらむ」という願いとなったのである。御息所の「女」というものに対する考えは、娘の頼りない生活を案じる母親としての不安な気持とともに、御息所自身の生活のやりきれなさや苦痛の思いに基づかれている。

さて、女三宮が新たな主人公として登場する『源氏物語』の第二部に入ると、物語は源氏の栄華の生活に至るまでを描いてきたそれまでの世界から一変して、余命少ないと感じた朱雀院が、かねてから志していた仏門に入った後、残される娘の女三宮の不安な将来を心配して思い悩む沈鬱な世界から語り始められる。この新しく繰り広げられる物語の世界では、すでに言われているように、高貴な女性の結婚問題が本格的に取り上げられている12)。

早くから母親を亡くしていた女三宮の将来については、父朱雀院の他に乳母にも深く心配されることであった。乳母による「女」という語も、そうした状況で用いられている。

> この御後見どもの中に、重々しき御乳母のせうと、左中弁なる、かの院の親しき人にて年ごろ仕うまつるありけり。この宮にも心寄せことにてさぶらへば、参りたるに会ひて物語するついでに、「上なむ、しかじか御気色ありて聞こえたまひしを、かの院に、をりあらば漏らしきこえさせたまへ。皇女たちは、独りおはしますこそは例のことなれど、さまざまにつけて心寄せたてまつり、何ごとにつけても御後見したまふ人あるは頼もしげなり。上をおきたてまつりて、また真心に思ひきこえたまふべき人もなければ、おのらは仕うまつるとても、何ばかりの宮仕に

12) 石田穣二氏は、この第二部の物語で主要人物によって提起されている問題は、若菜巻の発端に見られる朱雀院の「高貴の子女の結婚問題の不安」という認識に基づいた「女の宿世」であるという。(石田譲二「若菜の巻の発端について」(『源氏物語論集』桜楓社・昭和46・p.154))

www.kci.go.kr

かあらむ。わが心ひとつにしもあらで、おのづから思ひの外のこともおはしまし軽々しき聞こえもあらむ時には、いかさまにかはわづらはしからむ。御覧ずる世に、ともかくもこの御事定まりたらば、仕うまつりよくなむあるべき。かしこき筋と聞こゆれど、女はいと宿世定めがたくおはしますものなれば、よろづに嘆かしく、かくあまたの御中に、とりわききこえさせたまふにつけても、人のそねみあべかめるを、いかで塵も据えたてまつらじ」と語らふに、

（若菜上・29～30）

これは、女三宮の乳母が源氏に仕えている兄の左中弁に、源氏への結婚仲介を打診している場面である。ここで乳母が左中弁に言っている内容は要するに、女三宮にとっての保護者の必要性であり、これは前節で源氏が朱雀院に向けて言ったのとほぼ同じ内容である。皇女という最高の身分に生まれ育った女性は、独身を通すのが常例である[13]が、それも有力な世話役がいる場合のことである。女三宮のように父の朱雀院以外に心強い後見人のいない場合は、院の死後、女三宮が独り身で生きるのは安心できない。勿論東宮の援助を頼りにすることもできるが、細やかなことまでを期待するには限界がある。もしも朱雀院の亡くなった後でことが運ばれ、思いがけない間違いでも起きて浅はかな浮名を立てることになったら、宮の本人ばかりではなく仕える者の手抜かりも世間の非難の対象となり、困難なことになりかねない。どんなことがあっても、院が生きている間に宮を結婚させて気持よく宮仕えができたら、それ以上望むことはない。というのも、いくら高貴な血筋をもって生まれても、女というものは、男のように自分の運命を切り開いていけるものではないので、どんな運勢なのかはほんとうに分かりにくいからである。物語では女三宮の結婚の必要性を語るにあたって、女三宮の乳母の内、「重々しき御乳母」と母親の立場に一番近い存在の口を通して「女」という語を語らせ、そこには意外な境涯に陥りがちな「女」というものの不運で悲しい存在としての認識が基づかれている。

御息所や女三宮の乳母のように、母親の立場で娘の将来を案じていたのは、第三部の中将の君も同様である。中将の君は、中君に浮舟を託しながら、次のようなことを述べている。

「つらき目見せず、人に侮られじの心にてこそ、鳥の音聞こえざらん住まひまで思ひたまへおきつれ、げに、人の御ありさまけはひを見たてまつり思ひたまふるは、下仕のほどなどにても、かかる人の御あたりに馴れきこえんは、かひありぬべし。まいて若き人は、心つけたてまつりぬべくはべるめれど、数ならぬ身に、もの思ひの種をやいとど蒔かせて見はべらん。高きも短きも、女といふものはかかる筋にてこそ、この世、後の世まで苦しき身になりはべるなれと思ひはべればなむ、いとほしく思ひたまへはべる。それもただ御心になん。ともかくも、思し棄てずものせさせたまへ」と聞こゆれば、（東屋・56）

13)『河海抄』には「正三位源潔姫母当麻氏嵯峨天皇之女也天皇選聟未得其人太政大臣正一位藤原朝臣良房初参之時天皇悦其風操超倫殊勅嫁之一品康子内親王延喜皇女配九条右丞相生閑院太政大臣公季（源氏物語古注釈大成　第6巻・p．306）」と、皇女が降嫁した例は見られるが、その数はわずかで、嵯峨朝から花山朝までの歴朝の皇女百六十人余りの内、百三十九人までが未婚のままに生涯を終っていた。

www.kci.go.kr

ここで中将の君は、娘が結婚によって辛い目にあったり、無視されたりすることを避けるために、出家させようかとも思っていたという。こうした中将の君の考えは、娘浮舟の受け継いだ宮家の血筋に対する高い自負心に由来する。中将の君は、世間的には認められていないが、娘の高貴な素姓に相応しい相手と結婚させようとしていた。最初薫が浮舟を求めていたことを弁の尼から伝え聞いたときは、娘に有力な後見がいないことを理由にこの結婚に気乗りしなかった。ところが、薫の優れた姿を目にした後、それまでの気持から一変して、娘の薫との結婚を願うようになる。ただ、娘が薫と一緒になることで、一層悩みの種となることを増やしてしまうのではないか、と不安にも思っている。なぜなら、中将の君には、身分相違の結婚がどれだけつらいものであるのか、わが身をもって経験していたからである。実は、今の浮舟の後見人も財産もない境遇また中将の君の八宮との身分違いの結婚による結果であった。

というのも、八宮は、北の方の死後、人目を忍んで関係していた中将の君に浮舟が生まれたのを厭わしく思い、中将の君と浮舟を見捨てた。そのために中将の君は、浮舟をつれて常陸介の後妻となり、地方に下った。その後も、八宮に浮舟を認知してくれるよう頼むが、宮は一切認めない。そうして実父に見捨てられた浮舟は、養父の常陸介のもとで肩身の狭い生活を余儀なくされたのである。後見者や財産もない浮舟の境遇では、まともな結婚相手もない。母が浮舟の結婚相手にと期待していた左近少将も、浮舟が介の実の子でないことを知ると未練もなく去っていき、介の実の娘である浮舟の妹と結婚してしまったのである。これが今の浮舟の置かれた現実であった。それゆえに、中将の君は娘の薫との結婚を望みながらも、一方では心配の念をぬぐい取れないのである。

勿論、中将の君の内心では、薫が全く娘と掛け離れた身分の結婚相手とは思っていない。八宮には娘として認められていないが、中将の君にとって娘浮舟はあくまでも宮家の血筋をもって生まれた高貴な身の上なのである。しかも薫が浮舟を願うのは、浮舟を八宮の長女大君の形見と思っていたからであり、少なくともそれは娘を宮家の血を受け継ぐ存在として認めている証でもある。ただ、女の運命という面から考えると、女性にとって結婚というものは、必ずしも幸せになる道とはいえない。身分の高低に関わらず、女というものは男との関係でこの世だけではなく、あの世においてまで、苦しい境涯を生きる身にもなるからである。しかし、だからといって、今の娘に薫との結婚以外に安定した生活をする方法があるわけでもない。この中将の君の「女」に関する考えも、娘の結婚問題を契機にして導き出され、その背景には中将の君の「女」としての不幸なわが半生を顧みたことで認識されたものとして読み取れる。

このように母親たちは、娘の安定した生活を望んではいるが、結婚がすべてを解決するものではないことも、結婚によってさらなる苦しみが生まれることも分かっている。にもかかわらず、女性一人では自分の身が保てない。そうした「女」としてこの世を生き抜くことの難しさ

www.kci.go.kr

をわが身をもって実感し、「女」という語はその母たちの体験を背景にしているのである。

紫上もこれらの女性とほぼ同じく母親に近い立場で、「女」という語を用いているが、紫上の場合は、会話文ではなく心情語として表れ、その内容またより深く掘り下げられたものになっている。それでは、紫上は「女」としての自身の境涯をどのように見ていたのか。

五　紫上の自己主張としての「女」

紫上は、この世で自己をありつかせるものは、源氏以外に誰も存在しない孤独な身の上である。これまでの紫上の社会的な地位も経済的な安定も、すべて源氏との関わりによって生まれ維持された。紫上自身女三宮の降嫁をきっかけに、そのことを骨身にしみてわかった。源氏だけを心の支えにして生きてきた晩年の紫上が、「女」というものについてその心中を次のように述べている。

> 女ばかり、身をもてなすさまもところせう、あはれなるべきものはなし、もののあはれ、をりをかしきことをも見知らぬさまにひき入り沈みなどすれば、何につけてか、世に経るはえばえしさも、常なき世のつれづれをも慰むべきぞは、おほかたものの心を知らず、言ふかひなき者にならひたらむも、生ほしたてけむ親も、いと口惜しかるべきものにはあらずや、心にのみ籠めて、無言太子とか、小法師ばらの悲しきことにする昔のたとひのやうに、あしき事よき事を思ひ知りながら埋もれなむも言ふかひなし。わが心ながらも、よきほどにはいかでたもつべきぞ、と思しめぐらすも、今はただ女一宮の御ためなり。　（夕霧・456～457）

紫上の「女」としての心境は、夕霧と落葉宮の結婚話をきっかけにして述べられ、その内容はおよそ次のようである。女だけが自由に動けないし、思うとおりに表現することもできない。この世を生きていく中で経験することや感じること、それによって感動する心を表にあらわすことができなかったら、生きることに何の面白みがあろうか。自分でもこの世を生きること、とりわけ女として自己を保持していく、その程度のよさがわからないのに、若い女一宮はこれからいかに生きていくべきか。つまり、ここで紫上は、女としてこの世で自主的に生きることへの厳しさを吐露し、身の処し方の困難さを嘆いている。清水氏の言葉を借りると、これは「時代と社会の中で本然の姿をゆがめて生きることを余儀なくされている女の姿を見抜いた」紫上の心境を表したものであり、そこには「自我に目覚めてゆく近代人の心に通うもの」がある14)。

実はこの紫上の「女」としての嘆きは、すでに「雨夜の品定め」で語られていた「すべて、心に知れらむことをも知らず顔にもてなし、言はまほしからむことをも、一つ二つのふしは

14)　前掲書 注3）と同じ。（増補版『源氏の女君』塙新書・1967・p.99）

www.kci.go.kr

過ぐすべくなむあべかりける（帚木・90）」という「女」への社会の希求を、まるで抗議しているかのように記るされている。物語では、これまでにも女性としてしかるべき身の振り方を繰り返し強調してきた。例えば、源氏は養女の玉鬘に求愛してくる男たちの懸想文をめぐって、乳母の右近に次のようなことを言っている。

> すべて女のものづつみせず、心のままに、もののあはれも知り顔つくり、をかしきことをも見知らんなん、その積もりあぢきなかるべきを、宮、大将は、おほなおほななほざりごとをうち出でたまふべきにもあらず、またあまりもののほど知らぬやうならんも、御ありさまに違へり。
>
> （胡蝶・178）

だいたい女は、遠慮深くなく思う存分に物事にふれて起こる感情をあらわにし、よく心得ているような顔つきをしたり、あるいは風情なことに見分けがつかないなどして、それが積もればおもしろくない。このように女性は、自分の感情を表すことにも制約が多く、絶えずその身の振り方が注意されている。他にも内大臣などは娘の雲居雁を相手にして、女性の身の処し方について訓戒している15)。

この物語では理想的な結婚相手の女性を探し求めるのは、ほぼ不可能であるとしながらも、女性たちには理想的なあり方であることを求め続けている。それが女性たちにとって、どれほど身動きできない気詰まりな状態を作っていたのかは、紫上の心中の言葉からも推察できる。なお、登場以来、理想的な女性として描き続けられてきた紫上が、窮屈な女の身の上を嘆く点は、多いに示唆するところがある。特に女三宮の降嫁後の紫上は、常に源氏や明石君、そして夕霧などによって、その優れたあり方が強調されてきた16)。中でも、その理想像は源氏によって繰り返し語られていた。紫上の発病前夜も、源氏は紫上の心の遣い方を持ち上げて、「人により事にしたがひ、いとよく二筋に心づかひはしたまひけれ。さらに、ここら見れど、御ありさまに似たる人はなかりけり。（若菜下・211）」と、その優れたあり方を誉めていた。実は、紫上に対するこうした源氏の評価とは裏腹に、紫上の苦悩は深まっていくばかりで、その心労の重なりが一つの原因となって紫上は病に臥してしまうのである。この源氏の発言のすぐ後、紫上が発病したということは、紫上にとって「人により事にしたがひ、いとよく二筋に心づかひ」をすることが、どれだけ苦しみを伴うものであったのかを裏

15)「女は、身を常に心づかひして守りたらむなんよかるべき。心やすくうち棄てざまにもてなしたる品なきことなり。さりとて、いとさかしく身固めて、不動の陀羅尼誦みて、印つくりてゐたらむも憎し。現の人にもあまりけ遠く、もの隔てがましきなど、気高きやうとても、人憎く心うつくしくはあらぬわざなり。（常夏・239）」

16)「のたまはせねど、いとありがたき御気色を見たてまつるままに、明け暮れの言ぐさに聞こえはべる。めざましきものになど思しゆるさざらむに、かうまで御覧じ知るべきにもあらぬを、かたはらいたきまで数まへのたまはすれば、かへりてはまばゆくさへなむ（若菜上・131）」「かやうのことを、大将の君も、げにこそありがたき世なりけれ、紫の御用意、気色のここらの年経ぬれど、ともかくも漏り出で、見え聞こえたるところなく、しづやかなるを本として、さすがに心うつくしう、人をも消たず身をもやむごとなく、心にくくもてなしそへたまへることと、見し面影も忘れがたくのみなむ思ひ出でられける。（若菜上・134）」

www.kci.go.kr

付けている。紫上における理想的な評価は、紫上の誰にもいえない深い苦しみの上に成り立ったものである。

このように紫上の「女」に関する思考は、いうまでもなく紫上自身のそれまでの生活の中から痛切に確信となってきたことによるものである、と同時に、作者自身の女として生きることの難しさへの深い認識をも代弁しているといえよう。

今一つ、ここで見過ごしてはいけないのは、こうした紫上の女としての嘆きが、「今はただ女一宮の御ためなり」という言葉で締めくくられている点である。紫上は落葉宮の夕霧との再婚話を発端として、女としてこの世を生きることの困難さを吐露しているが、それは紫上のわが半生を振り返ったことによる女の生き方への自覚としてあるばかりではなく、これからそうした時代と社会を生きていかねばならない女一宮の将来を心配する思いからなるものである。当時を生きる女性の姿を鋭く見抜いた紫上の洞察力も、母親の立場になってはじめて発揮されることになるわけである。しかもそれを口に出すことなく、心中思惟としてしか表出できなかった点には、女性の自己の生活に対する主張も、いまだ芽生えの状態にあるといわざるをえない。そして、このような紫上の「女」としての心境は、第三部以降になると、大君の自分の判断によって自らの生き方を選んでいく主体的な姿として発展深化していくことになるのである17)。

六　おわりに

以上のように、『源氏物語』に用いられている「女」という語をキーワードにして、物語における女性への考え方を考察した。この物語では冒頭の部分に女性論の総論と言われる「雨夜の品定め」を設定しておき、男性による女性への見解を多様に打ち出している。それはよき妻の条件や妻のとるべき態度に焦点を当て、男の男による男のための理想的な結婚相手への希求として表れている。そのために、女性自身の立場や悩みなどは顧みられていない観念的なものになっていた。

一方、女性の場合、結婚は自己の生活と密接に関わっていたために、より内面的で切実な問題にならざるをえなかった。ただそれも、男の口を通されると、結婚による女性の生活の安定に重点が置かれることになり、とりわけその傾向は有力な後見者のいない皇族女性の場合に目立って表れていた。つまり、男性の立場で用いられる「女」は、親兄弟、あるいは夫の世話にかかる依存的な存在としての女性のあり方を強調し、女性の結婚による安定した生活の確保という面を重視している。

17)拙稿「大君の結婚問題に関する一考察―「隔てなき心」を中心に―」（『日本文化学報』第39輯・2008.11 p.57～67)

www.kci.go.kr

それに比べて女性による「女」という語は、そうした社会を生きる女性たちが自身の「女」としての境涯を、どのように見ていたのかを示すものとなっている。女性の立場で用いられる「女」は、すべて娘の結婚に関する母親の立場と悩みとして表れている。女性の場合は、母親となる女性の体験による自己認識が含まれていただけに、女性にとっての結婚は生活の安定ばかりではなく、女性の生き方の一つの問題として見つめようとする態度が見られる。中でも、紫上の「女」としての嘆きは、社会的には低い位置を占めていながらも、理想的なあり方であることが求められている、息苦しい時代を生きていく女性たちの苦痛を訴えっているのである。なおそこには女性の主体的な生き方への希求という自己主張が芽生えている。

【参考文献】

新編古典文学全集（『栄華物語』小学館 · 1998)
源氏物語古注釈大成6（『河海抄』日本図書センター)
源氏物語古注集成 7 （『細流抄』おうふう)
和辻哲郎（『日本精神史研究』岩波書店 · 1927 · p.130～143)
清水好子（増補版『源氏の女君』塙新書 · 1967 · p.5～106)
竹村義一（『源氏物語の女性像』有精堂 · 1970 · p.164～186)
石田譲二（『源氏物語論集』桜楓社 · 1971 · p.154～176)
増田繁夫（『源氏物語と貴族社会』吉川弘文館 · 2002 · p.66～108)

www.kci.go.kr

要 旨

本稿は『源氏物語』における「女」という語を一つの手がかりにして、女性への考え方について検討を施したものである。『源氏物語』はそれ以前の文芸作品には例を見ないほど、女性に関する見解を多く残している。中でも、光源氏が本格的に物語の主人公として活躍する帚木巻では、女性に関する考え方が集約されている。それは結果的に理想に叶えられる女性は実在しないということで終わってしまうが、話が男性の観点に立って進められたために、女性自身の立場や悩みなどは顧みられていない観念的なものになっている。

それに比べて女性の場合は、結婚は自己の生活問題と密接に関わっていたので、より内面的で切実な問題になっている。ただそれも男の口を通されると、後見者による女性の生活の安定に重点が置かれることになる。とりわけそれは皇族女性の場合に目立って表れていたことを「女」という語から確認することができた。

ところで、女性による「女」というすべての例が、母親の立場で娘を思う心から発せられ、結婚問題にかかわっている点は注目される。勿論それは母親に限らず、父親にとっても同様である。ただ、女性の立場で述べられる「女」に対する考えは、母親となる女性の体験や思考に基づかれたもので、娘の結婚による生活の安定ばかりではなく、女性の生き方の問題にも繋がっている。とりわけ、紫上の「女」としての嘆きには、社会のあらゆる面において弱者の立場で不利な条件を生きながらも、より人間的な存在として自己の意味を探ろうとする女性の深い悩みを思わせるものがある。

キーワード：　「女」、後見者、母親、結婚、生き方、自己主張

투　　고：2009. 5. 31
1차 심사：2009. 6. 13
2차 심사：2009. 6. 27

www.kci.go.kr